Ⅱ

大学入試

高校生の進路選択・進学指導の今日的な難しさ

進路選択に関する高校生の状況について見ると、大学進学の拡大の中での大学選びの難しさが浮かびあがった。一つは、大学進学に対する高校生の意識の曖昧さである。高等学校長の回答を見ると「大学の教育内容をよく理解しないまま受験する生徒が多い」「志望校をなかなか決められない生徒が多い」との比率が３割以上を占める（図2-3）。

「大学の学部・学科が多様で、教員が個々の生徒に適した進学先をすすめることが難しい」との回答が高校全体の実に５割に達している点も注目される（図2-3）。一方で「今の大学で学生が何をどのように学ぶのか、高校の教員には理解しづらい」「大学が提供する教育内容などの情報は、高校生には分かりづらい」との回答も５割近くに上る。大学と受験生が「相互選択の時代」に入ったと言われる高大接続において、大学からの情報提供が高校生の妥当な進路選択を促すために極めて重要であることを示している。

推薦・AO入試で「学力基準」をどう設定するのか

ところで、推薦入試・AO入試における学力不足が問題として指摘されて久しい。この状況は今回の調査でも確認された。「一般入試に比べ、推薦・AO受験者の基礎学力が不足している」との認識は高校・大学ともに５割を超え、高校では７割近くに達している（図2-3）。

こうした状況を打開すべく、政府からは、大学入試改革の一環として高校の基礎学力を問う達成度テスト（基礎レベル）が提唱され、推薦・AO入試でのスコア利用による学力確保につなげようとしている。しかし調査結果に目を向けると、学力不足に対する共通認識がある一方で、大学では「学力が足りない学生も合格させざるを得ない」が５割弱に達している。また高校では「推薦・AO入試でなければ大学に進学できない生徒が多い」との回答が６割に達した。すなわち、大学では学生募集、高校では進路保障という現実の諸問題がある中で、推薦・AO入試に達成度テストを用いたとしても、そこで合否判定に用いる学力の最低基準をどう設定するのか、困難な課題を突きつけられているといえるだろう。

今後の入試のあり方について

こうした種々の課題がある中で、今後の大学入試の方向性について何が求められているのか。高校・大学の共通意識として見られたのが、大学入試は「教科学力を中心に評価」（高大ともに８割）しつつ「思考力・表現力などの多様な能力を今以上に重視して評価するのがよい」（高大ともに７割）との点である（図2-11）。ただし、この「教科学力」と「教科学力以外の思考力・表現力など」の入試における重要性を比較してもらうと、高大ともに６割が入試で最も重視すべきは「教科学力」であり、「大学入試はまず教科学力の評価」が土台である（図2-12）。

さらに高大の共通認識として示されたのが、「入学者選抜の方法はこれ以上多様化しないほうがよい」との回答が、高校・大学ともに９割近くに達していることだ（図2-11）。「とてもそう思う」との回答だけをみても４割に達している。また大学では７割以上が「入学者選抜における教職員の負担が大きい」と回答しており、入試の負担感も相当のようだ（図2-3）。一方、高校の４割弱が「選抜方法の多様化により、生徒の大学選択が難しくなっている」との認識を示しており、進路指導上の困難も来している。

「これ以上の多様化は好ましくない」とする高大の共通認識を見ると、大学入試を全体としてどのようなシンプルな制度として再編成できるかが、その実効性を担保する上で大きな鍵になると思われる。

（ベネッセ教育総合研究所　主任研究員　樋口　健）

2-1. 入学者選抜の実施状況

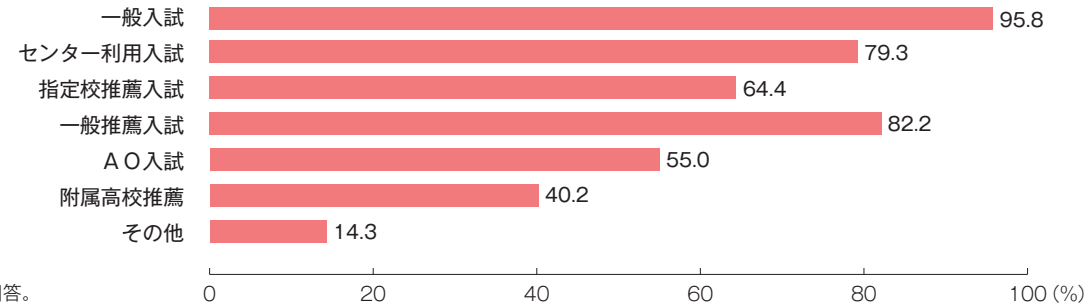
推薦・AO 入試で学力試験を課しているのは、一般推薦入試 38.0%、AO 入試 14.1%。

入学者選抜の方法別に実施率をたずねたところ、「一般入試」95.8%、「一般推薦入試」82.2%、「センター利用入試」79.3% の順に多い（図２－１）。

次に、「一般推薦入試」「AO 入試」の選考方法をたずねた結果が図２－２である。学力試験は「一般推薦入試」で 38.0%、「AO 入試」で 14.1% が実施している。教科学力を含む面接試験を行っている割合は、「一般推薦入試」30.4%、「AO 入試」36.8% である。

Q 貴学科では、次のうち、どの入学者選抜方法を実施していますか。今年度の入学者について、あてはまるものすべてに○をつけてください。

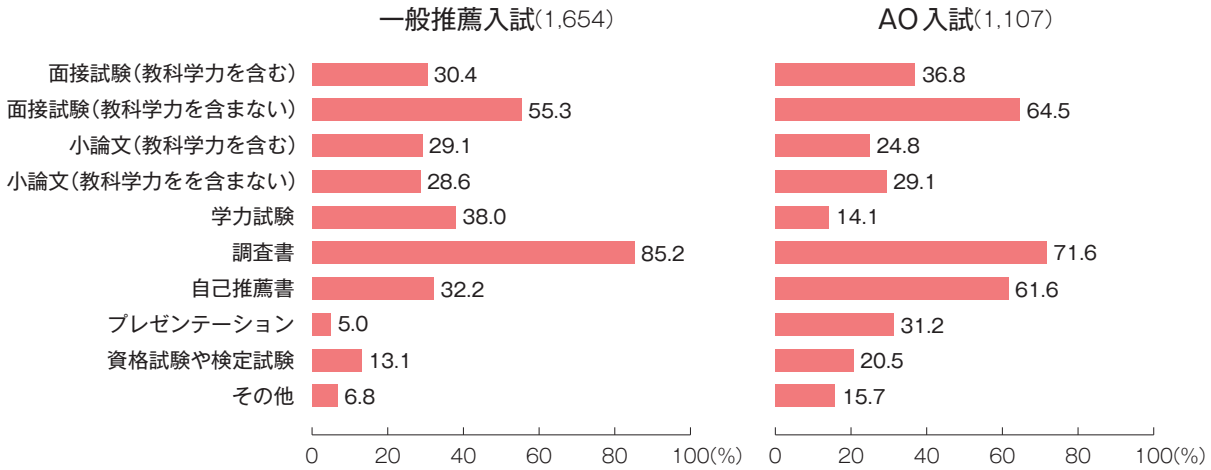
図２－１　入学者選抜方法別実施率（全体）　大学



注）複数回答。

Q 「一般推薦入試」または「AO入試」を実施している場合にお聞きします。
貴学科の「一般推薦入試」「AO入試」では、何に基づいて選考を実施していますか。

図２－２　一般推薦入試・AO入試の選考方法（各入試実施学科）　大学



注）対象は、「一般推薦入試」「AO入試」を実施していると回答した学科。（　）内はサンプル数。（図２－１参照）。

2-2. 進路選択・入試における課題

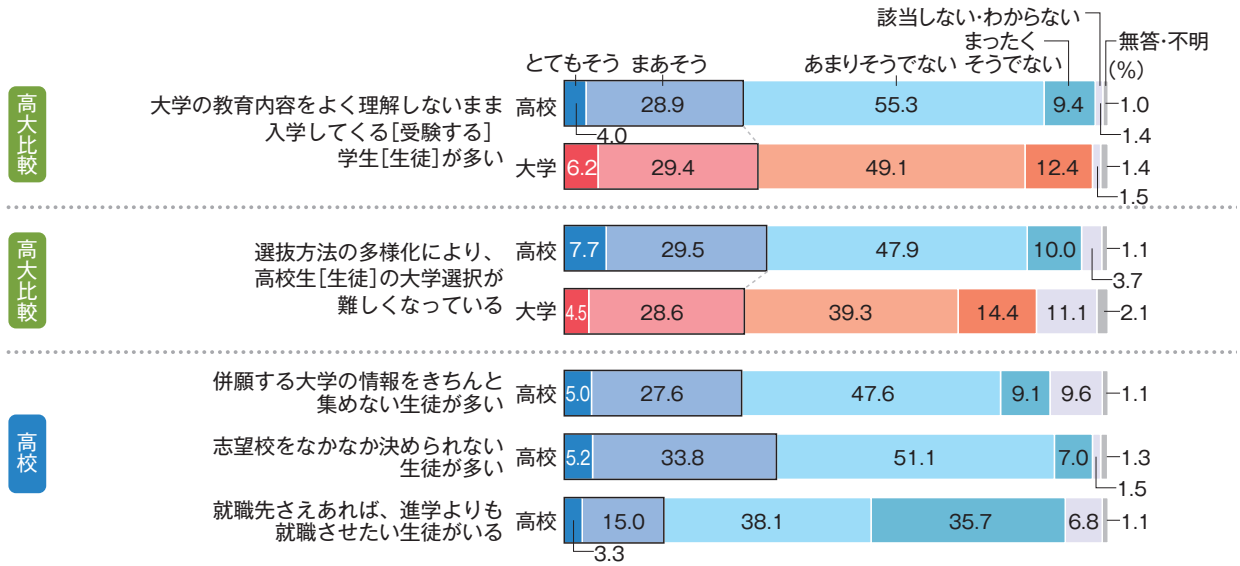
高校・大学双方に、現在の入学者選抜の課題として、高校生（入学者）の進路選択の実態、推薦・AO 入試の実態、アドミッションポリシーが機能しているのか、についてたずねた。また、高校に対しては、大学からの情報提供が足りているのか、大学に対しては、入学者選抜の実施・運営上の課題や志願者数にかかる課題についてたずねた結果を以下に示す。

Q 貴学科［貴校］の入学者選抜［大学受験］における課題について、お聞きします。

図２－３　入試の課題（全体）　高校　大学

▶高校生の進路選択に関すること

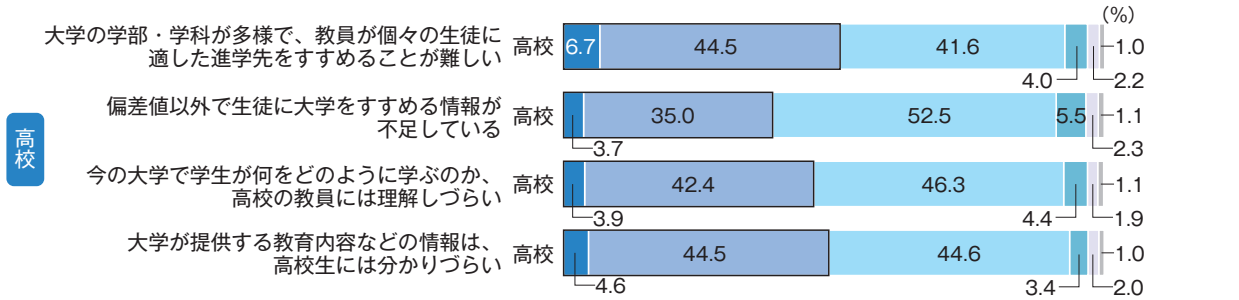
「選抜方法の多様化により大学選択が難しくなっている」と感じているのは高大ともに３分の１程度。



注）［　］内は、高校に対する質問内容。

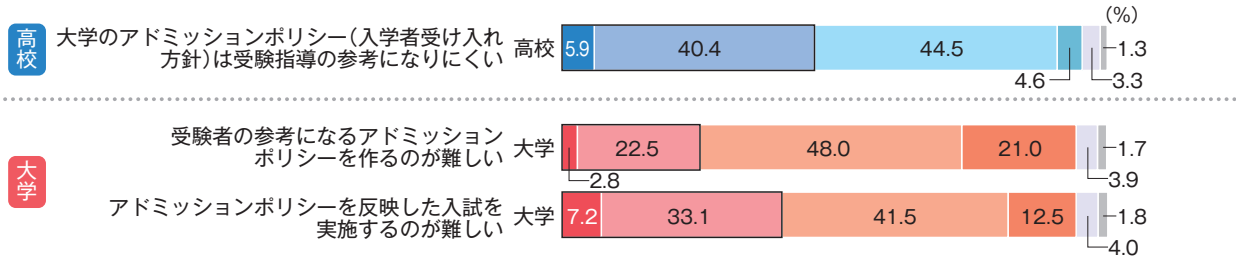
▶大学の情報に関すること

高校の５割が、大学からの情報は、高校教員や高校生にとって分かりづらいと感じている。



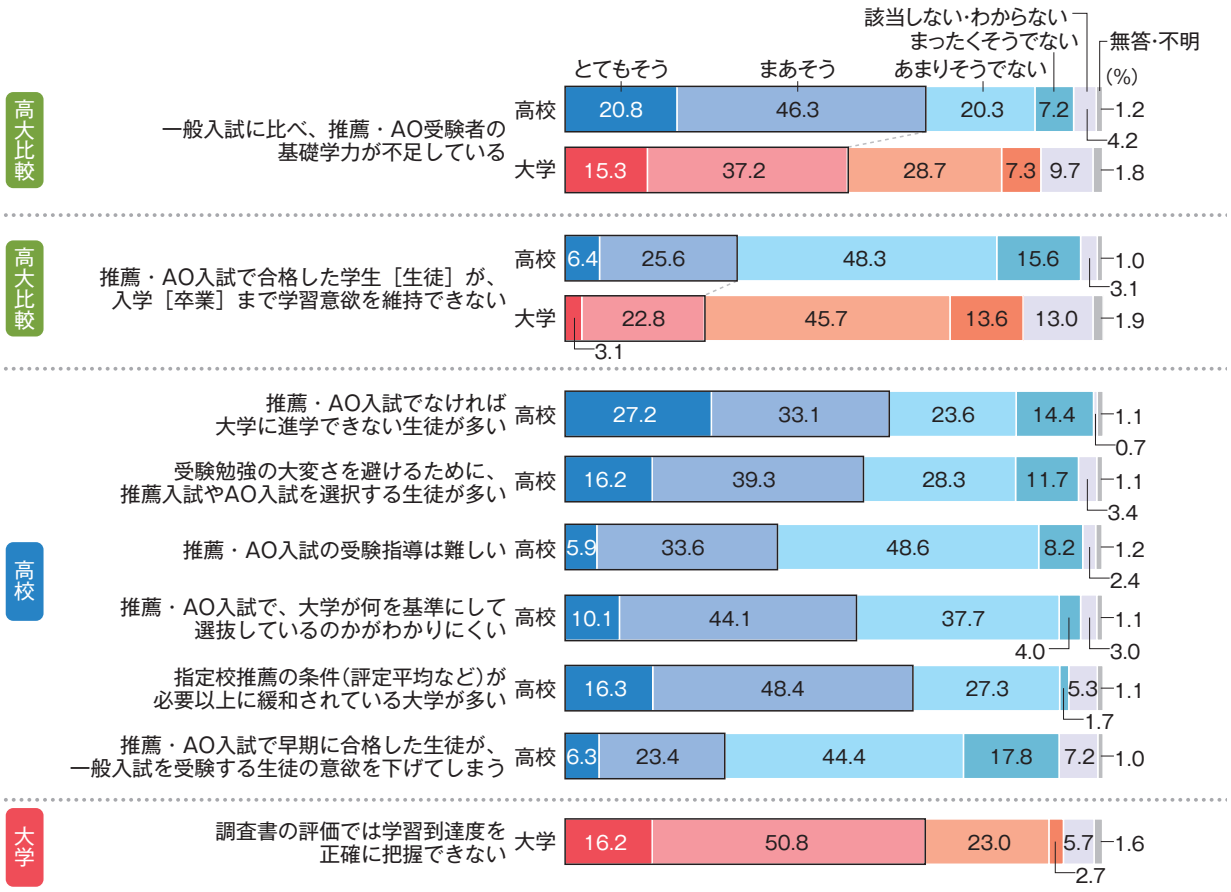
▶アドミッションポリシーに関すること

半数近い高校で、アドミッションポリシーは参考になりづらいと感じている。



▶推薦・AO入試に関すること

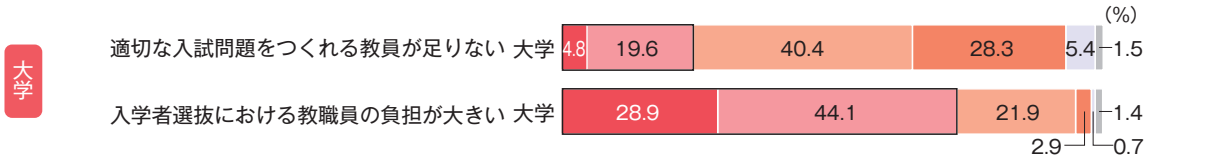
一般入試より推薦・AO受験者の基礎学力が不足していると感じている高校が67%。大学より15ポイント高い。



注）［　］内は、高校に対する質問内容。

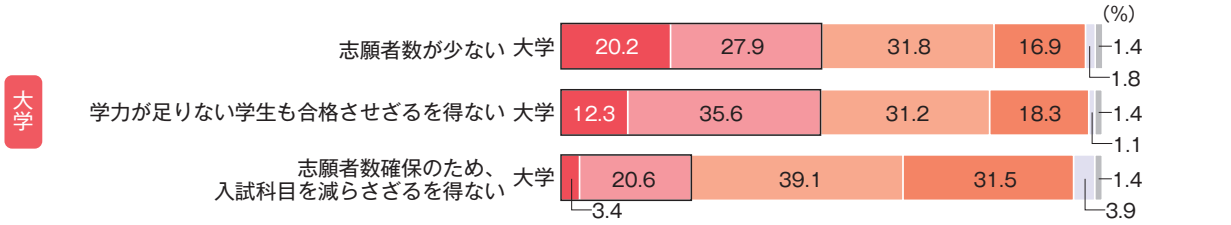
▶入学者選抜の実施・運営に関すること

73%の学科で、入学者選抜の負担が大きいと感じている。



▶志願者数に関すること

学力が足りない学生も合格させざるを得ない学科が5割弱。



2-3. 教科の必要度と入試での受験割合

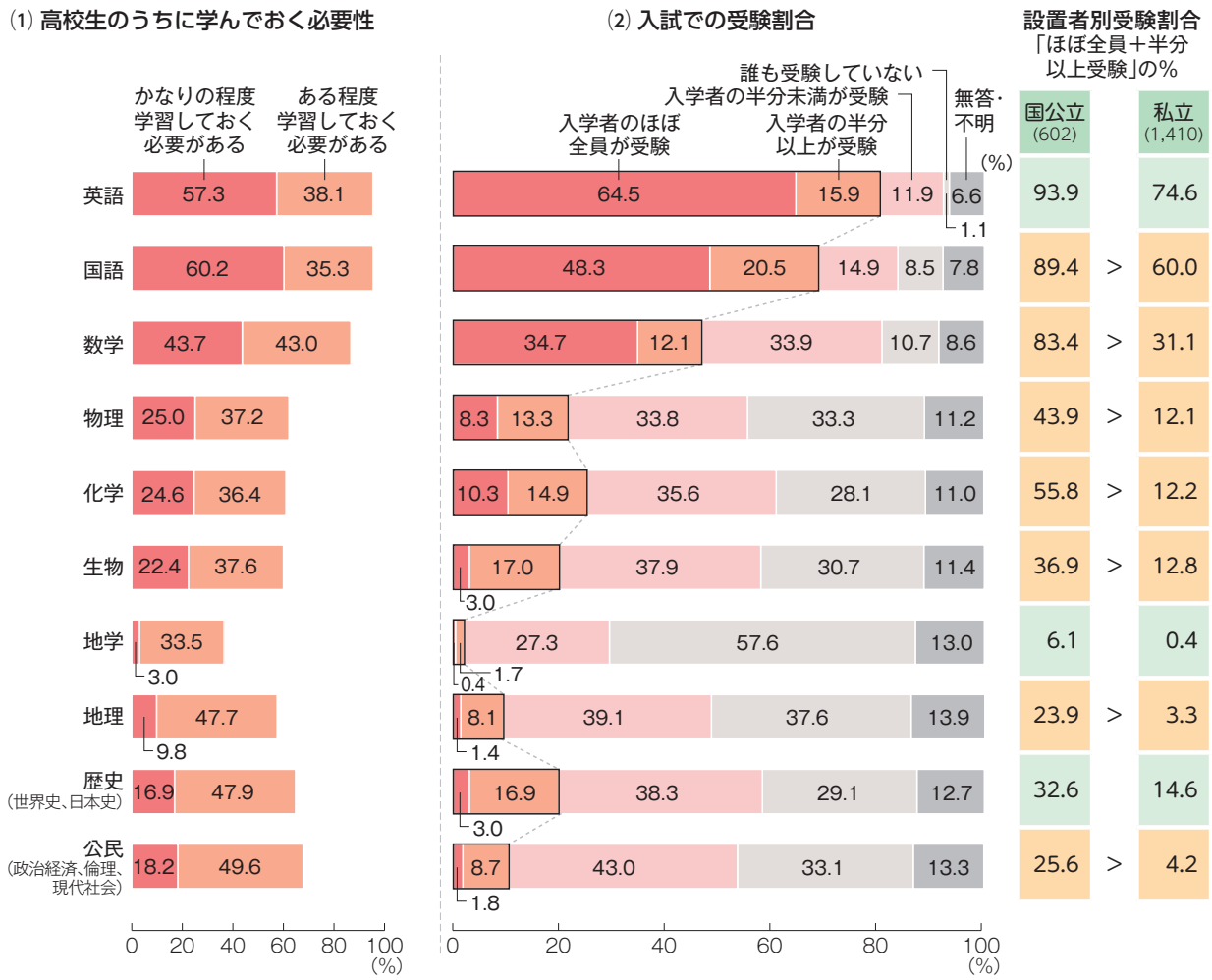
高校生のうちに学んでおく必要性の高い教科・科目は「英語」「国語」。

大学に対して、高校の教科・科目別に学習の必要度と、各教科・科目を入試で受験している入学者の割合についてたずねた。まず、必要度については「かなりの程度学習しておく必要がある」教科・科目として全体で高かったのが「国語」60.2%、「英語」57.3%である。「ある程度学習しておく必要がある」も含めると、いずれも95%の必要度を感じている。次に、これらの各教科・科目の入試での受験割合であるが、「入学者の半分以上が受験」「入学者のほぼ全員が受験」を合計した値（＝半分以上が受験している割合）をみていくと、「英語」は80.4%、「国語」は68.8%である。さらに、これを「国公立」「私立」別にみると、「国語」は「国公立」で89.4%が半数以上受験しているのに対し、「私立」は60.0%となっている。

Q

外国語（英語）・国語・数学・理科・地理歴史・公民の6教科についてうかがいます。
（1）貴学科の学生が専門分野を学ぶ上で、高校生のうちに各教科・科目を学んでおく必要性をどの程度感じていますか。
（2）貴学科の学生のうち、入試（センター試験、個別試験含む）で次の教科・科目を受験しているのは、どれぐらいですか。

図２－４　教科別の学習必要度と入試での受験割合（大学・設置者別）　大学

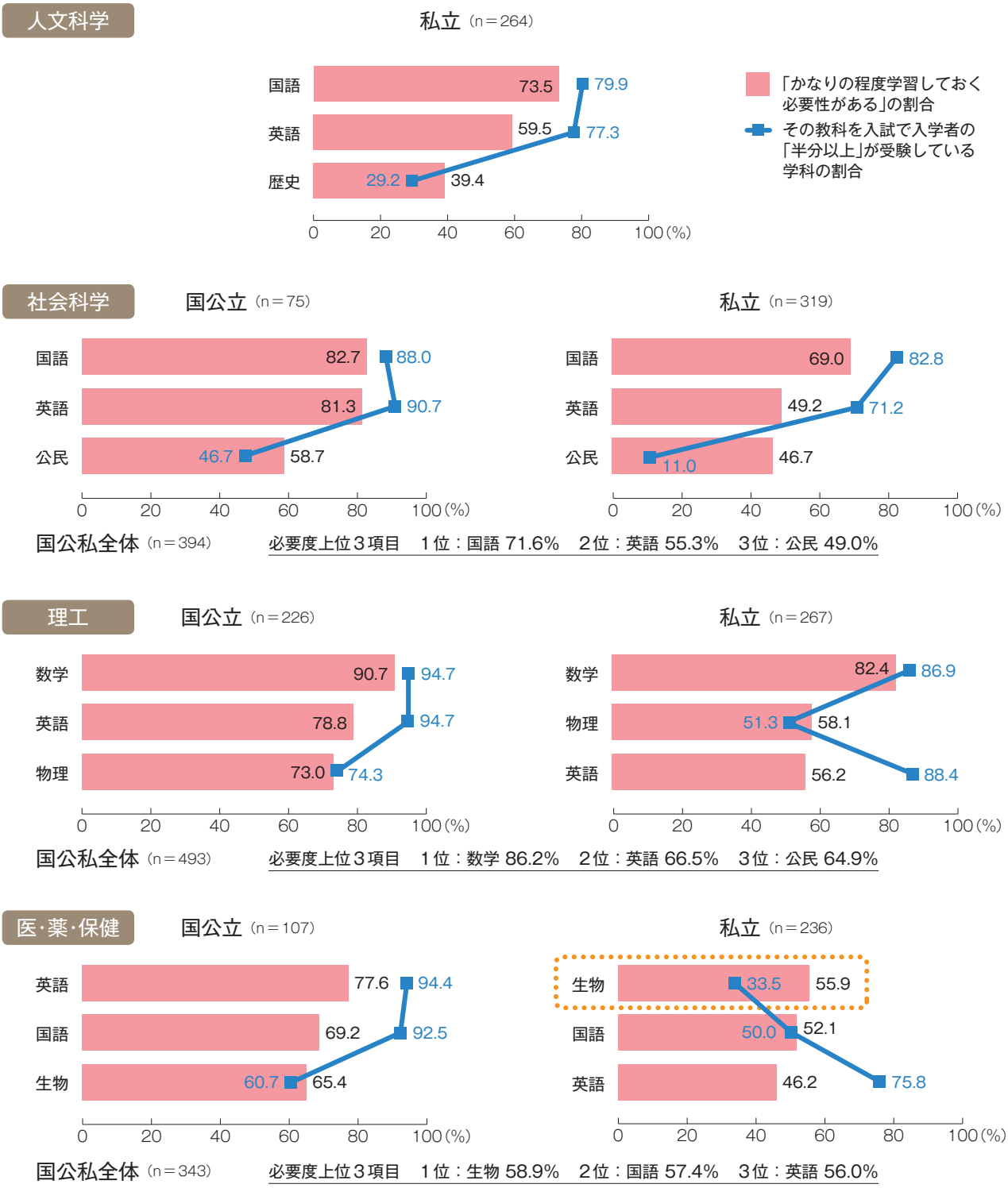


注）右表の「＞」と■は、「国公立」と「私立」で20ポイント以上の差があることを表す。

私立の「医･薬･保健」系学科では、「生物」の必要度に対し、入試での受験率は低い。

大学の学科系統別・設置者別に学んでおく必要性の高い教科・科目上位３つと、それらについて入試で入学者の「半分以上が受験」している割合（「入学者のほぼ全員」＋「入学者の半分以上が受験」）を表したものが下図である。必要性のある度合いが高いにもかかわらず、入試での受験率の低いのは、私立の「医・薬・保健」の「生物」であった。「生物」は「かなりの程度学習しておく必要性がある」の回答が55.9％と最も高いのに対し、入試で「半分以上が受験」と回答した学科は33.5％にとどまっている。

図２－５　「かなりの程度学習しておく必要性がある」上位３教科と受験割合（４学科系統別） 大学



注）人文科学の「国公立」は該当サンプル数が少ないので省略している。

2-4. 現在の入試で把握できていること

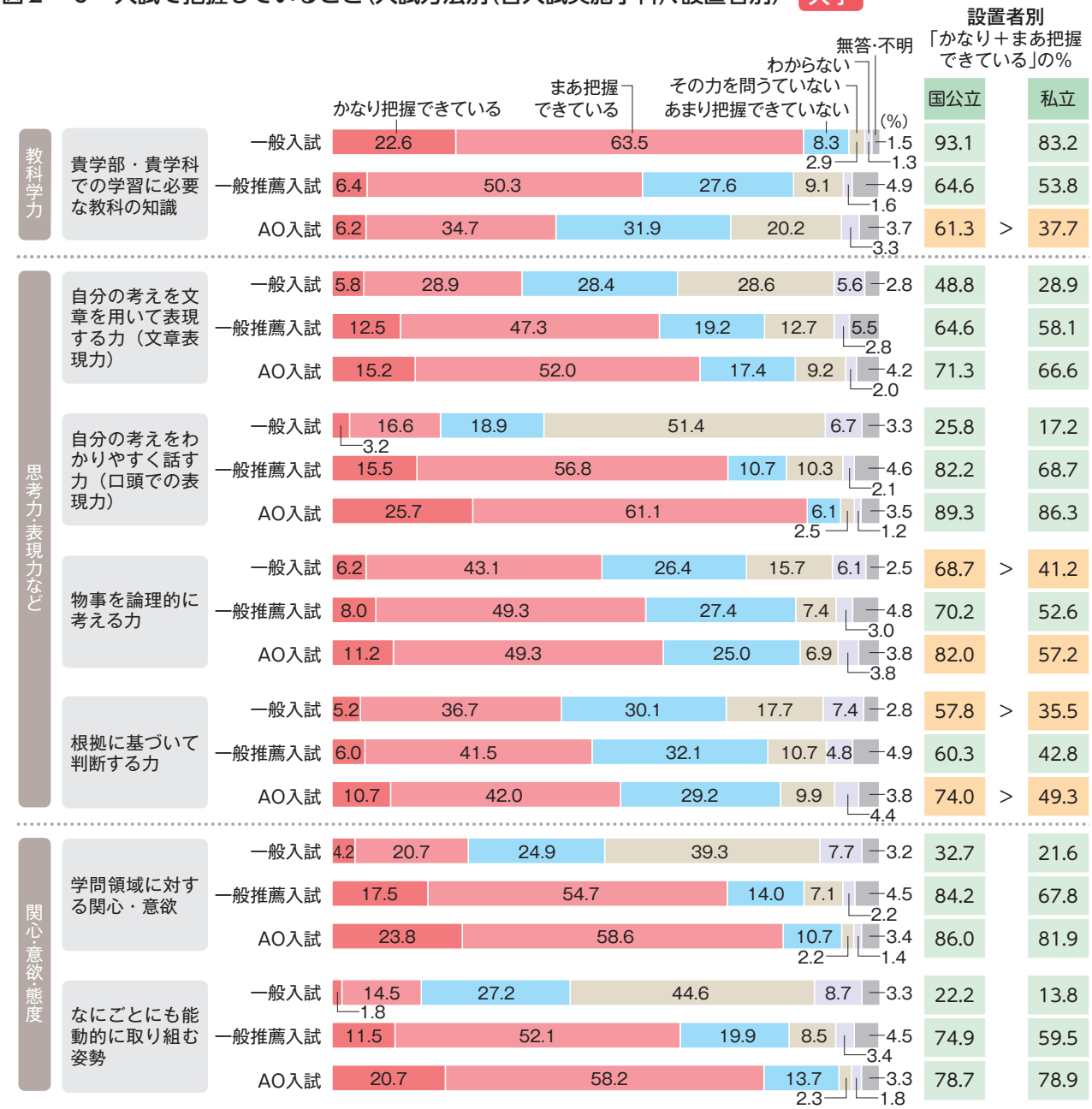
一般入試では教科知識、推薦・AO入試では「口頭での表現力」や「関心・意欲」が中心。

入試方法別に、「教科学力」「思考力・表現力など」「関心・意欲・態度」に関してどの程度入試で把握できているかをたずねた。「一般入試」で把握できている(「かなり把握できている」＋「まあ把握できている」、以下同)と感じている比率が高いのは「教科の知識」86.1%である。一方、「一般推薦入試」「AO入試」では「自分の考えをわかりやすく話す力(口頭での表現力)」「学問領域に対する関心・意欲」「なにごとにも能動的に取り組む姿勢」の把握率が高く、「教科の知識」は相対的に低くなっており、「一般入試」と「一般推薦入試」「AO入試」では逆の傾向がみられる。

設置者別にみると、「国公立」では「一般入試」でも「物事を論理的に考える力」や「根拠に基づいて判断する力」をそれぞれ68.7%、57.8%が把握できているとし、「私立」より20ポイント以上高くなっている。

Q 貴学科では、入試を通して、入学者のどのような能力や意欲を把握できていると思いますか。「一般入試」「一般推薦入試」「AO入試」の3つの入試方法について、以下の項目の能力や意欲を学科としてどの程度把握できているか、それぞれあてはまるもの1つに○をつけてください。

図2－6　入試で把握していること(入試方法別(各入試実施学科)、設置者別)　大学



注1）サンプル数は一般入試1,927、一般推薦入試1,654、AO入試1,107(各入試方法を実施している学科のみ。P.11の図2－1参照。)
注2）右表のサンプル数は、一般入試⇒国公立:562、私立:1,365、一般推薦入試⇒国公立:443、私立:1,211、AO入試⇒国公立:150、私立:957。
注3）設置者別の表の「>」と■は20ポイント以上の差がみられるものを表す。

2-5. 現行の入学者選抜の評価と今後の意向

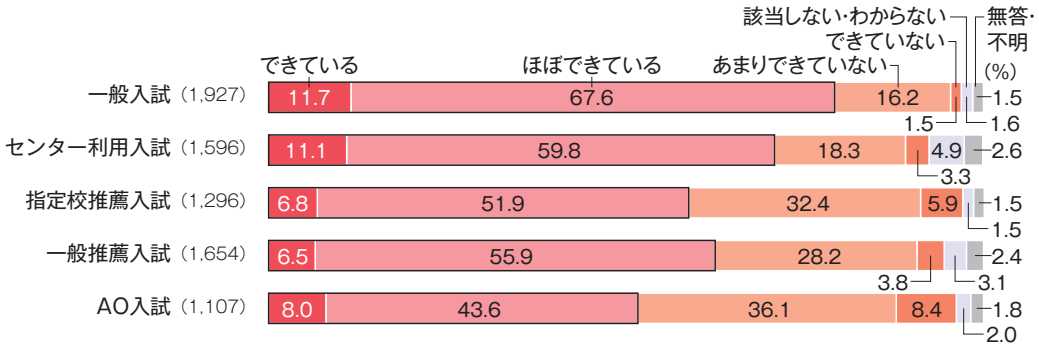
「AO入試」で入学させたい学生が選抜できていると感じているのは約半数。

現在実施している入試方法別に、入学させたい学生が選抜できているかをたずねたところ、どの入試方法についても、5割以上が「できている」(「できている」＋「ほぼできている」)と回答している。しかしながら「AO入試」については「できていない」(「あまりできていない」＋「できていない」)も44.5%と半数近い。

大学の入試方法別に今後の入学者数をどのようにしていきたいと考えているのか、どの入試方法についても「現状維持」が半数以上ではあるが、「一般入試」は「増やす」が4割で「減らす」はほとんどいない。

Q 総合的にみて、貴学科の入学者選抜では、学科として入学させたい学生が選抜できていますか。

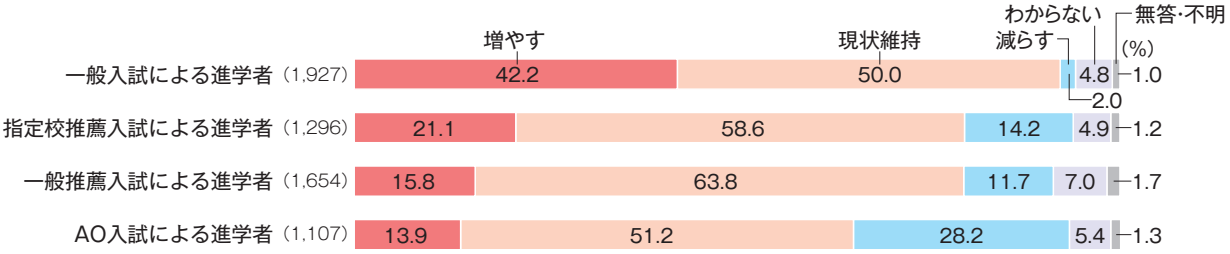
図2－7　入試方法別の評価(各入試方法実施学科)　大学



注）対象は、各入試方法を「実施している」と回答した学科。(　)内はサンプル数。

Q 貴学科では、次のような入試方法で入学する学生数を、今後どのようにしていきたいとお考えですか。

図2－8　入試方法別の今後の実施意向(各入試方法の実施学科)



注）対象は、各入試方法を実施していると回答した学科。P.11の図2－1を参照。

2-6. 受験させたい入試方法

推薦・AO入試は、専門学科で受験意向が高い。

高校が、今後生徒に積極的に受験させたい(「できるだけ受験させたい」＋「まあ受験させたい」)と思う入試方法は、高校全体では「一般入試」が76.4%と最も高く、「AO入試」が43.2%で最も低い。これを学科別にみると、「一般入試」「センター利用入試」は普通科で受験させたいという意向が高く、「指定校推薦入試」「一般推薦入試」「AO入試」は専門学科で高い。さらに、普通科の四年制大学進学率別にみると、進学率「30%以下」の高校ではそれ以外と傾向が異なり、「一般推薦入試」「指定校推薦入試」を受験させたいという回答が7割を超えて高くなっている。

Q 貴校では、生徒にどのような入試方法で積極的に受験させたいと思いますか。

図2－9　生徒に受験させたい入試方法(全体)　高校

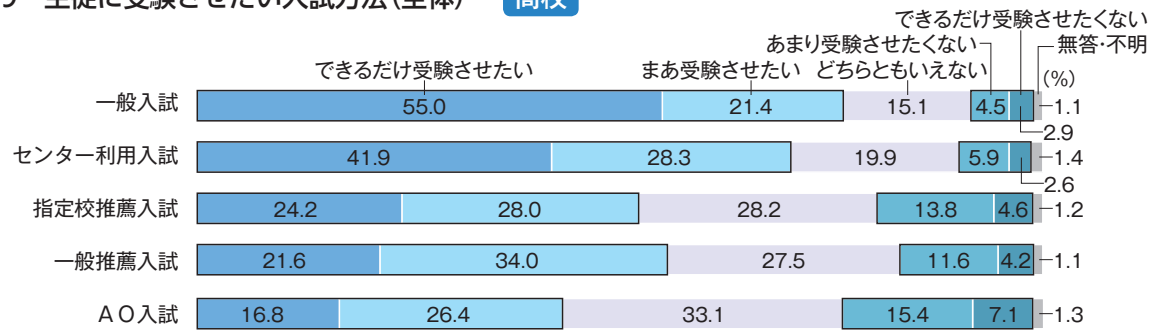
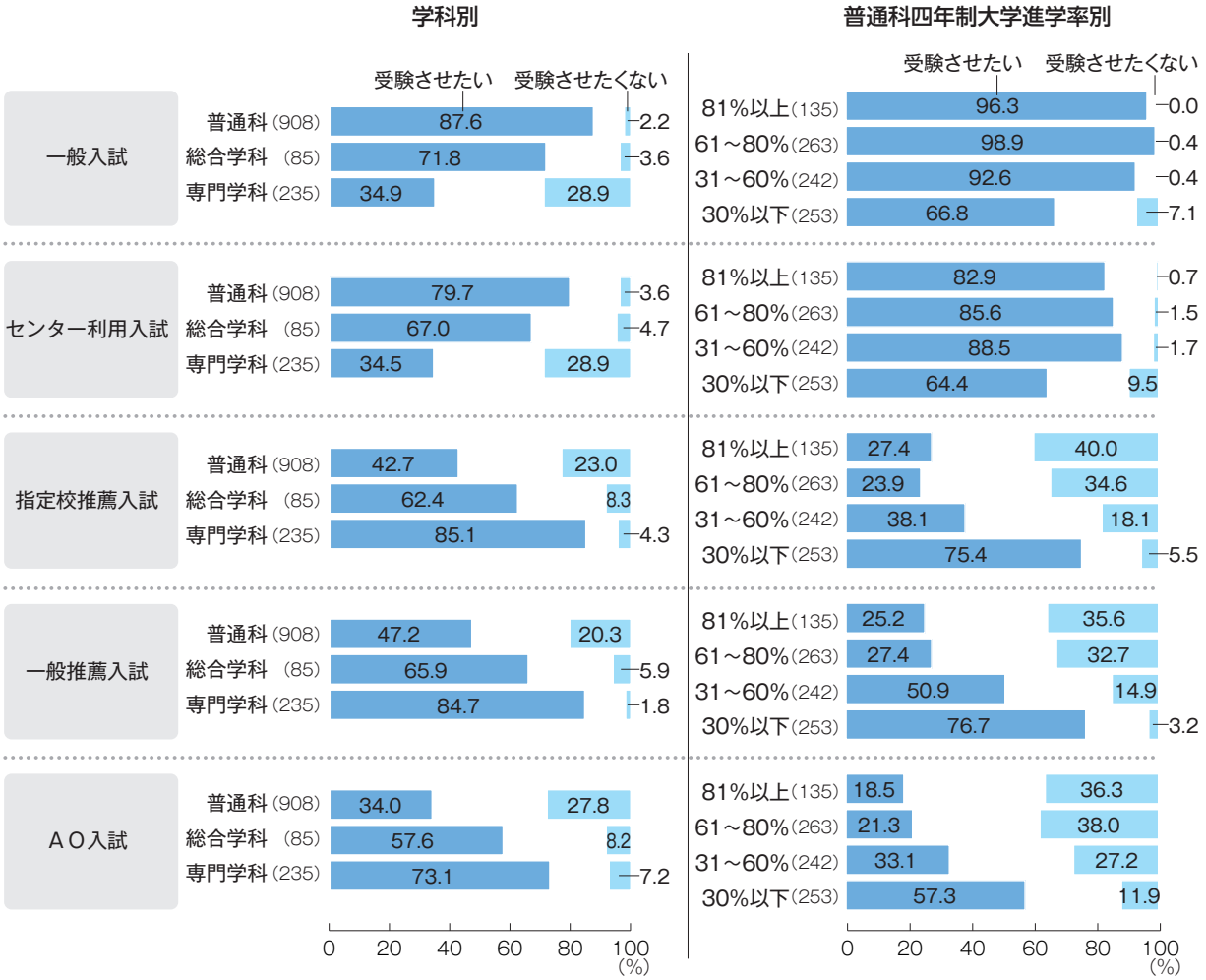


図2－10　生徒に受験させたい入試方法(学科別・普通科四年制大学進学率別)　高校



注1）「受験させたい」は「できるだけ受験させたい」＋「まあ受験させたい」の%、「受験させたくない」は「あまり受験させたくない」＋「できるだけ受験させたくない」の%を表す。
注2）図では、「どちらともいえない」「無答・不明」の値は省略している。そのため2つの項目を足しても100%にならない。

2-7. 今後の入試のあり方

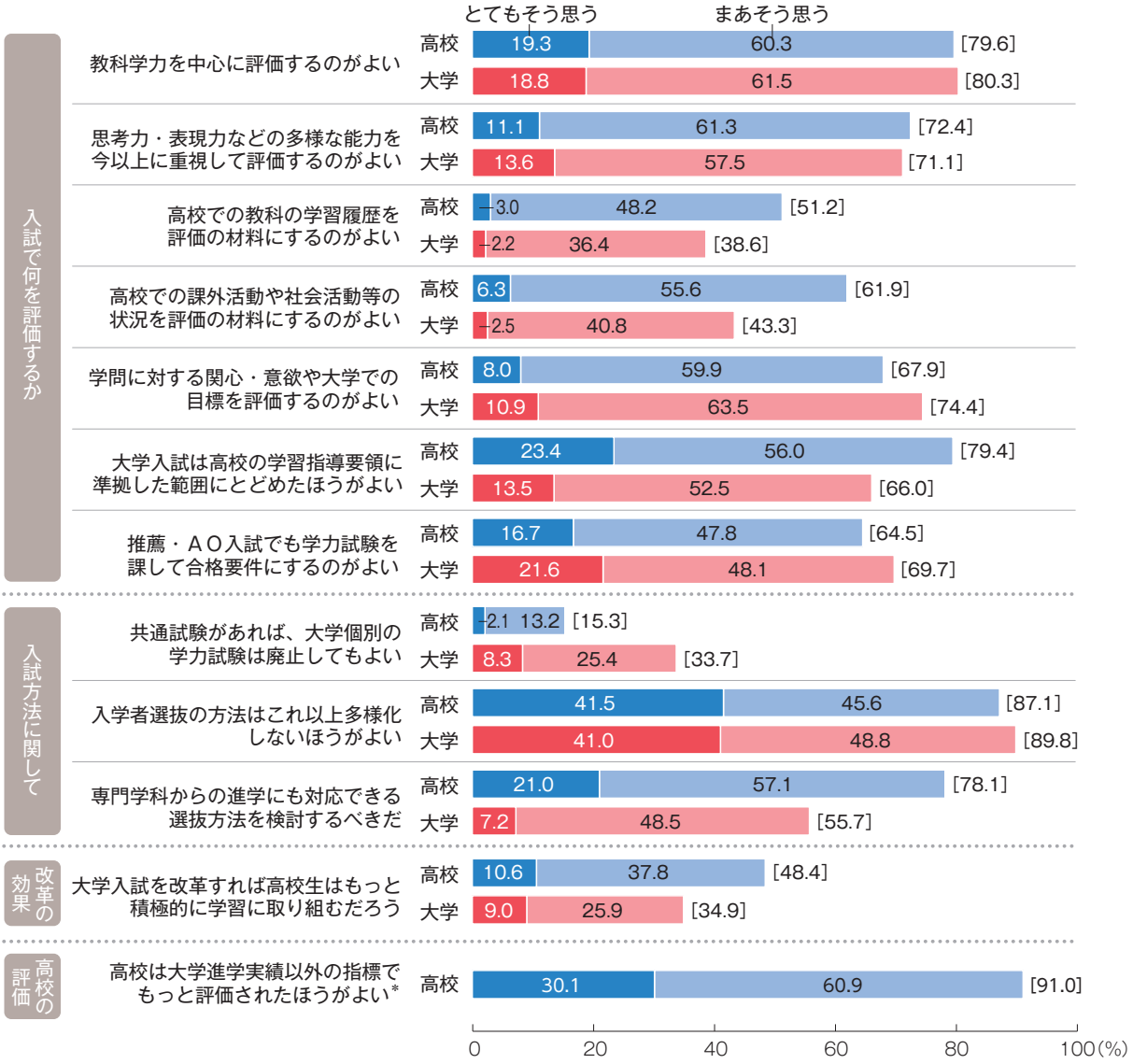
「入学者選抜の方法はこれ以上多様化しないほうがよい」が高校・大学とも９割。

今後の入学者選抜のあり方に関して、入試で何を評価するかについては、「教科学力を中心に評価するのがよい」を肯定率(「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同)が８割で最も高いが、同時に「思考力・表現力などの多様な能力を今以上に重視して評価するのがよい」や「学問に対する関心・意欲や大学での目標を評価するのがよい」も７割前後と高くなっている。「高校での課外活動や社会活動等の状況」や「高校での教科の学習履歴」を評価の材料にすることについては高校では肯定率が５割を超えるが、大学では４割程度にとどまっている。さらに、出題の範囲については、高校の８割が「大学入試は高校の学習指導要領に準拠した範囲にとどめたほうがよい」としている。

また、入試方法に関しては、「入学者選抜の方法はこれ以上多様化しないほうがよい」が高校・大学ともに約９割で、「とてもそう思う」だけでも４割にのぼり、一層の多様化に対する強い懸念がうかがえる。また、改革の効果に対しては、「大学入試を改革すれば高校生はもっと積極的に学習に取り組むだろう」と考えるのは、高校では半数だが、大学では３分の１程度となっている。そして、高校で最も支持が高かったのは、「高校は大学進学実績以外の指標でもっと評価されたほうがよい」で、９割を超えている。

Q あなたは、今後の入学者選抜に関する次のようなことがらについてどのようにお考えですか。

図２－11　今後の入試のあり方について(全体)　高校　大学



注１）選択肢は「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の４段階。
注２）＊の項目は、大学にはたずねていない。

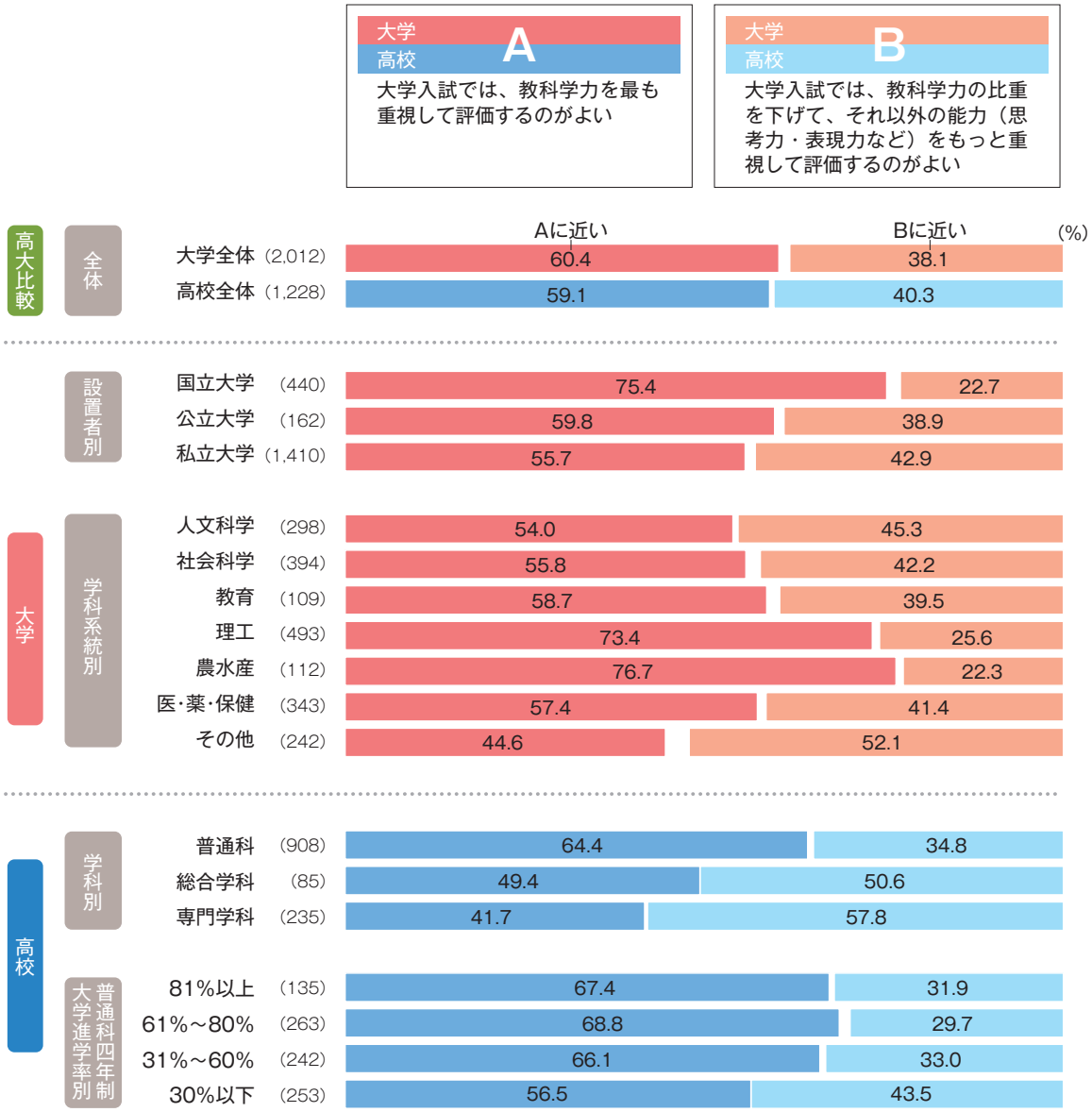
2-8. 入試における教科学力のウェイト

国立大学や「理工」「農水産」系統の学科で教科学力重視が高い。

大学入試で、教科学力と、それ以外の能力（思考力・表現力など）の評価についてどの程度重視するのがよいと思うか、高校、大学双方に意識をたずねた。高校・大学ともに「A：教科学力を最も重視して評価するのがよい」のほうが約6割で高い。大学では「国立」や「理工」「農水産」といった理系の学科で「教科学力重視」が7割を超えている。一方、高校では、普通科で「A：教科学力を最も重視」が64.4%と高く、専門学科では「B：教科学力以外を重視」のほうが57.8%と高い。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図2－12　大学入試における教科学力のウェイトに対する考え（全体・属性別）　高校　大学



注）「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

2-9. 多面的な評価について

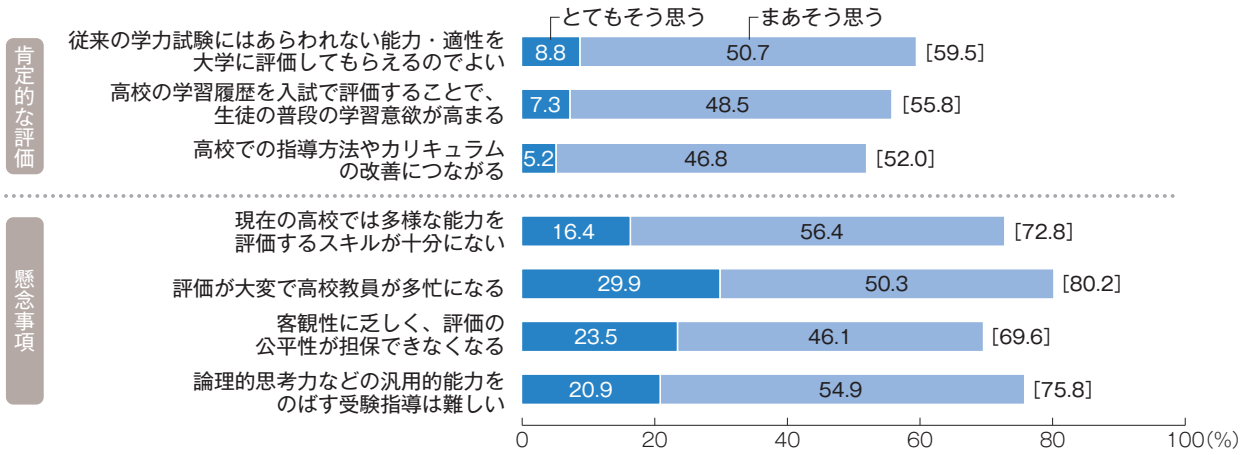
多面的な評価を６割の高校が肯定的にとらえているものの、評価の負担・方法、指導方法などの不安は高い。

大学入試改革で議論されている、多面的な評価について高校はどのように感じているのだろうか。懸念事項として高かったのは、「評価が大変で高校教員が多忙になる」で、８割が「そう思う」(「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同)と回答している。また、「論理的思考力などの汎用的能力をのばす受験指導は難しい」や「現在の高校では多様な能力を評価するスキルが十分にない」の肯定率も７割を超え、評価による負担や指導法、評価方法などについての不安が高い。しかしながら、多面的評価を実施した場合のプラス面について、「従来の学力試験にはあらわれない能力・適性を大学に評価してもらえるのでよい」と６割は肯定的に受け止めている(図２－13)。

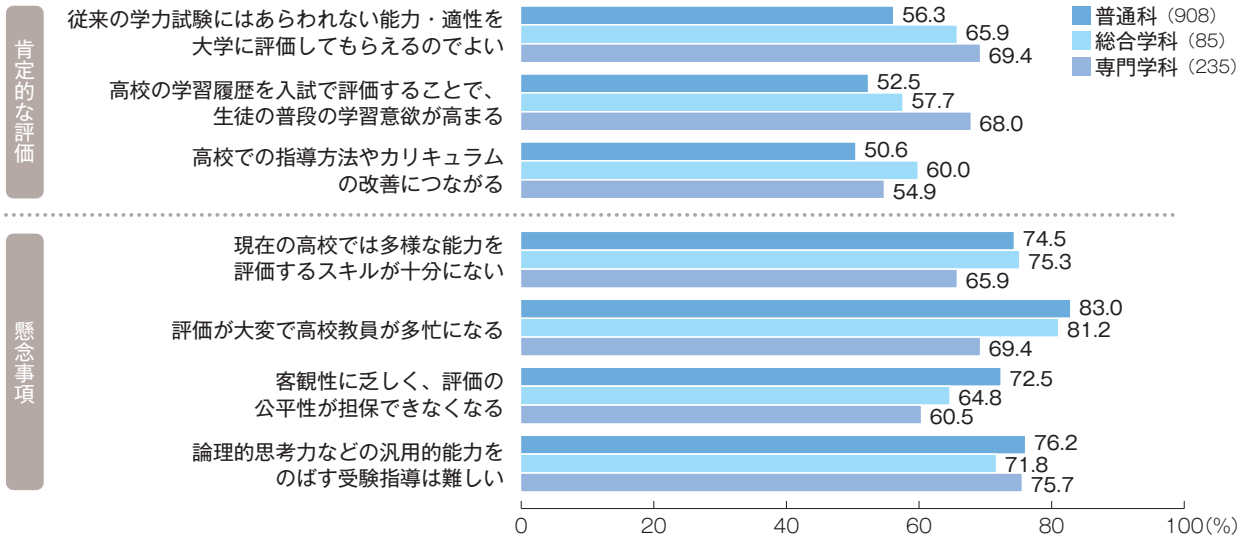
これを学科別にみると、「高校の学習履歴を入試で評価することで、生徒の普段の学習意欲が高まる」が専門学科で68.0%と高く、普通科では52.5%と15.5ポイントのひらきがみられる(図２－14)。

Q これからの大学入試に関する議論の中で、入試では教科学力に加え、それ以外の多様な能力（例：論理的思考力などの汎用的能力）や高校時代の学習履歴を通じた能力の伸長を評価すべきとの声があります。あなたは、このことに関連して、どのようなことを思われますか。

図２－13　多面的な評価について(全体)　高校



注１）［　］内の値は、「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。
注２）選択肢は、「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の４段階。

図２－14　多面的な評価について(学科別)　高校

「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。